

# 第三章 助動詞・態

## 助動詞

### レクチャー 1

#### 助動詞に関する基礎知識。

##### (1) 助動詞とは。

助動詞とは will, can, may, must, should などを指して言うことは皆さんよく知っていると思いますが、一言で助動詞の機能[働き]を説明するとすれば、

動詞の前に置いてその動詞に(話者・筆者の判断などの)意味を付け加える

と定義付けることができるでしょう。たとえば

The meeting will be successful.

という英文中の助動詞 will は、「その会合は成功する(The meeting is successful)」という文意に、「ほぼ確実にそうなるだろう[予測・推量]」という話者の判断を付け足しています。

##### (2) 助動詞の基本的な特徴。

助動詞には(基本的に全ての助動詞に共通する)6つの特徴があります。

①(平叙文では)助動詞は常に主語の直後に置く。

(ex) I must finish the task.

ボクはその仕事を終えなければならない

=The task must be finished.

⚠上例のようにたとえ受動態になって(主語が変わって)も、助動詞はやはり(新たな)主語の直後に置かれる。

②助動詞の後ろの動詞は原形になる。

(ex) You should pay your debts. 借金は支払うべきです  
[原形]

③否定する場合は、自身の直後に not(などの否定語)を置く。

(ex) You may not smoke here.  
ここでたばこはお吸いになれません

④疑問文では「助動詞+S+V [原形]~?」の形になる。

(ex) May I come in?  
入ってもよろしいですか

⑤主語が3人称単数でも助動詞には(3単現の) s はつかない。

⑥助動詞は並べて使うことはできない。

- × He will can play golf.  
彼はゴルフができる
- He will be able to play golf.

### (3)助動詞を効率的に理解するコツ。

それは、各助動詞の『核(core)』のイメージをつかむことです。  
助動詞の意味[用法]は、

- ①『核』のイメージに直接由来するもの
- ②『核』のイメージに「推量」の意味が加わったもの

の2つに分けることができます。

たとえば will を例にあげれば、will の『核』のイメージは

「(強い)意志」

です。

そこから直接由来する意味として以下があります。

- ①「~するつもりだ」 [強い意志・固執]  
◎主語の強い意志を表す。

② 「～するものだ」 [現在の習慣[習性]・一般的傾向]  
「どうしても～したがるものだ」

③ Will you do[願]～? 「～ませんか」 [勧誘・依頼]  
= Won't you do[願]～? 「～してください」

會相手の意志を問う。そこから「勧誘・依頼」の意味が生まれた。

更に will の『核』のイメージ(「意志」)に「推量」が加わる場合というのは、他者の意志について語る場合です。その時、「～する(つもり)だろう」という文字通り「推量」の意味が生まれます。

④ 「～だろう」 [(現時点での)予測・推量]

この考え方は、他の助動詞にも当てはまります。

そしてこのようなとらえ方[アプローチ]をすることで、助動詞をより効率的に理解することができるでしょう。

## レクチャー2

### may の用法。

may は、「五分五分の可能性[余地]」という判断を、動詞に付け加えます。

會つまり「～してもいいし、～しなくてもいい」「～かもしれないし、～でないかもしれない」というイメージ。

読解用には(4)以外の用法と、(6)の may を用いたイディオムの知識を整理しておくといいでしょう((4)の「許可の may」は、ほとんど会話文でしか出て来ない)。

(1) 「～できる(かもしれない)」「～してもさしつかえない[してもよからう]」

[可能・容認]

(ex) We may count the ship as lost.

船は行方不明になったと考えてよいだろう

We may now prove that he is innocent.

これで彼は無罪だと証明できるだろう

It may be said (that) she is the best singer (of all).

彼女は最高の歌手と言ってもさしつかえない

(2) 「～するかもしれない」 [可能性・推量]

④ 「五分五分の可能性」として推量する。

(ex) It may snow tomorrow.

明日は雪が降るかもしれない

may よりも「確信の度合いが弱い」推量を表すのが might です。might は、形は(mayの)過去形ですが、現在の推量・可能性を表します。

④過去を表す副詞(句・節)を伴って、might が過去の推量・可能性を表すことも、以下の英文のようにないわけではないが、大学入試などではあまり出てくることはない。

(ex) In his youth, wild wolves might still be found there.

彼の若い頃、そこではまだ野生の狼が見つかることもあったかもしれない

実際、助動詞の過去形が(時制の一致以外で)「過去」の意味を表すのは、could と would の一部の用法のみと置いていいでしょう(これらについては詳しくは後述)。

(ex) Don't lock the door. They might not have the key.

ドアに鍵をかけないで。彼らはキーを持っていないかもしれませんから

上記の例文も、過去のことを述べているわけではありません。ちなみに could は、might よりも更に「確信の度合いが弱い[低い]」推量を表します。

(3) 「譲歩」の may。

①譲歩節で用いられる may

②逆接語とセットで用いられる may

このような may を「譲歩の may」と言いますが、特に①の may は訳す必要はありません。②の場合、「～と言える(かもしれない)」「～だろう」くらいの訳でいいでしょう。

(ex) She may be rich, but she is vulgar.

彼女は金持ちかもしれないが、下品だ

Times may change, but human nature stays the same.

時代は変わるだろうが、人間の本性は変わらないものだ

Come what may, my love will not change.

=Whatever may happen

どんなことがあっても、私の愛は変わらない

📖 come what may などは、決まり文句として覚えてしまった方が早い。

#### (4) 「～してもよい」 [許可]

(ex) You may go home now.

さあ、家に帰ってもいいですよ

You may not feed the animals. 📖このような「不許可」の may は注意が必要。詳しくは下記を参照せよ。

動物達に餌をやらないでください

#### 「許可の may」に関する注意事項。

「～してもよい」という「許可」の may を否定した「may not」は、「不許可(～してはいけない)」を表す。「許可」にしろ「不許可」にしろ、may を使うとやや高圧的な感じになるので、「不許可」なら代わりに can't を使うことが多い。また「許可」を与えるには、会話では Sure. Go ahead. とか Yes, of course. などと言うことが多い。

#### (5) 「～でありますように」 [祈願]

「祈願(～でありますように)」の may の見極め方は、(May が文頭にある)疑問文の語順なのに文末尾に！があつたら(あるいは？がなかったら)、**「祈願の may」とみるといいでしょう。**

(ex) May all your Christmases be white!

ホワイトクリスマスでありますように

May you live happily!

あなたが幸せにお暮らしになれますように

#### (6) may を用いたイディオム。

##### ① may well do[原形]～

1. 「～するのももつともだ」 =have good reason to do[原形]～

=It is natural that S+(should)+V～

㊦ 「可能・容認」の may が well によって強調されたものと考えたらいい。

(ex) You may well get angry with her.

君が彼女に腹を立てるのももっともだ

=You have good reason to get angry with her.

=It is natural that you should get angry with her.

2. 「たぶん[きっと]~だろう」 =S is likely to do[願]~

㊦ 「推量」の may が well によって強調されたものと考えたらいい。

(ex) It may well be true. それはたぶん本当だろう

② may[might] as well do[願]~ (as do[願]...) 「(…するくらいなら)~した方が  
いい[ました]」

㊦ might を使うと現実味が薄れ、比喩的[仮定的]な意味合いが強まる。

(ex) You may as well come with me.

私と一緒に来た方がいい

You may as well do it now as (do it) later, since you must do it anyway.

後でするよりもそれは今やった方がいいよ。どうせそれをしなくてはならないのだから。

You might as well throw your money away as lend it to him.

彼に金を貸すくらいなら、捨てた方がまだよ

③ so that S may[will/ can] V[願]~ 「Sが~するために[できるように]」

=in order that S may[will/ can] V[願]~

㊦ 「目的」を表す表現。

(ex) Work hard so that you may succeed.

成功できるように一生懸命働きなさい

can の用法。

can は、「現実になりうる[なされうる]」という判断を、動詞に付け加えます。  
 ㊦つまり「実現の可能性がある」ということ。

(1) 「～できる」 [能力] =be able to

(ex) Can you speak English?  
 あなたは英語が話せますか

助動詞は 2 つ並べて用いることができないので、「～できるだろう」と、未来の内容を will と共に表したい時は、必ず be able to を用います。

(ex) He will be able to [×can] come tomorrow.  
 彼は明日は来られるだろう

(2) 「～してもよい」 [許可]

(ex) You can use this car any time.  
 いつでもこの車を使ってもいいですよ  
 Can I use your CD player?  
 あなたのCDプレーヤーを使ってもいいですか

(3) 「～の可能性はある」「～し[であり]得る」 [可能性・推量]

㊦「現実になりうる」ことを推量する。

(ex) Can she say that?  
 彼女がそんなことを言う(可能性はある)だろうか

(4) cannot で「～する[である]はずがない」 [否定的断定]

これは「可能性」の can の否定（実現可能性がない）と考えたらいいでしょう。

(ex) The rumor cannot be true.  
 その噂が本当であるはずがない

(5) can を用いたイディオム。

- ① cannot do【原形】～ too… 「いくら～しても…しすぎることはない」  
=cannot do【原形】～ enough

このイディオムは、解釈問題などで意味を理解するのに苦勞することがあります。  
これを解決する裏技は、このイディオムは「命令文」あるいは「should+do【原形】  
～」で書き換えられる、ということです。

(ex) You cannot be too careful in choosing your friends.

=(You should) Be (very) careful in choosing your friends.

友人を選ぶ際には、注意してしすぎるということはない

You cannot begin learning a foreign language too early.

=(You should) Begin learning a foreign language early.

外国語の学習を始めるのに(年齢が)早いに越したことはない

I cannot thank you enough.

=I should thank you so much.

お礼の申し上げようがありません

- ② cannot help doing～      ① 「～せずにはいられない」  
=cannot (help) but do【原形】～      ② 「～せざるを得ない」

(ex) I could not help telling her the truth of the matter.

=I could not but tell her the truth of the matter.

ボクは彼女に事の真相を話さずにはいられなかった

He couldn't help but be a little vague.

彼が少しあいまいな態度だったのはやむをえなかった

レクチャー4

could の用法。

could は can の過去形ですが、実際、文字通り「過去」の意味を表すのは、(1)の用法のみ(could have+p.p.は除く)です。(2)は仮定法。(3)～(6)は can よりも「確信の度合い」が弱まったもので、いずれも内容的には「現在」の内容を表します。



(1) 「～できた」 【能力・可能】

(ex) He could climb trees easily when he was young.

彼は若いころは木に楽々と登ることができた

《 重要! could と was[were] able to の違い 》

1. could は「～する能力があった」だけであるのに対し、was[were] able to はこの意味に加えて「～する能力があり、かつ実際に行なった[できた]」ことも表すことができる。

(ex) My father could[was able to] swim well when he was young.

父は若いころ泳ぎがうまかった

Ⓜ上例は、そういう能力があったことを示している(永続的能力)。

しかしながら、上例のような過去を示す語句(when ~ young)なしで「～する能力があった」という意味の could が使われることはまずない。その理由は仮定法の could と混乱を避けるため。

(もちろん前後関係から過去の内容を指すことが明らかである場合には、そのような語句なしに「過去」を表す could が使われることはありうる)

(ex) My father was able to[×could] swim across the river.

父はその川を泳いで渡ることができた[実際に渡った]

Ⓜ上例の用に、過去の一回の行為として「～することができた(実際に行った)」という場合には was[were] able to や managed to を用いる。

2. 否定文では could も was[were] able to と同じように用いることができる。

(ex) I could not[=was not able to] answer the question.

私はその質問に答えることができなかった

3. 受身では could が用いられ was[were] able to be+p.p.～という形は使わない。

(ex) The door could not[×was not able to] be opened.

そのドアは開かなかった

## (2) 「～しようと思えばできる」 【仮定の能力】

この could は、仮定法(過去)の if 節が省略されたものと考えてもいいでしょう。現実にはありえない内容と共に用います。

(ex) I'm so hungry that I could eat a pig.

あんまりおなかがすいて、ブタ 1 頭でも食べられそう

## (3) 「～でありうる」 【可能性・推量】

can よりも「確信の度合い」が弱い、現時点での推量を表す。

これも本来は仮定法(過去)の用法です。会話ではこの用法が多いといえます。can にもこの用法がありますが、can(may・might) より、could を用いた方が「確信の度合い」が弱くなります。「ひょっとしたら～だ」くらいの意味になるのです。

(ex) “Is it true that he's bought a Ferrari ?” “It could be.”

彼がフェラーリを買ったって、本当かな かもね

## (4) 疑問文で「一体全体どうして～か」 【強い疑い・否定的な推量[可能性]】

これも本来は仮定法(過去)の用法で、can を使う場合よりも、「ありえない」という気持ちが強くなります。

(ex) How in the world could you do that?

一体全体、なんだってそんなことをするんだ

ちなみに「could have+過去分詞」で、過去のことについての推量を表します。could not have+p.p.～ は、cannot have+p.p.～ とあまり内容的には変わりません。

(ex) Who could have borne to see such a scene?

だれがそんな光景を直視できたのだろうか

can bear to do[原形]～で「～するのに耐える」。bear の活用は bear - bore - born(e)。

You could not have seen Bill because he is still abroad.

君はビルに会ったはずがないよ。彼はまだ外国にいるのだから

(5) Could I do[願]～? で「～してもよいでしょうか」 [許可]

(Can I ～? よりも)丁寧な「許可」を求める表現になります。

(ex) Could I sit here a minute?

ここにちょっと座ってもよいでしょうか

上例は I wonder if I could sit here a minute. と表現できます。応答には Yes, you can. などを用い、Yes, you could. は不可です。

(6) Could you do[願]～? で「～していただけませんか」 [依頼・要請]

(Can you ～? よりも)丁寧な「依頼・要請」を表す表現になります。

(ex) Could you repeat that?

もう一度おっしゃってくださいませんか

(7) 「could have+p.p.～」。

①仮定法過去完了の用法「～することもできただろうに」

會過去の事実と反する仮定を述べる。

(ex) If you had asked me at that time, I could have told you what happened.

あの時君が私に聞いてくれたら、何が起きたのか話してあげられたのに

②現在・当時から見た過去の推量「～だった(の)かもしれない」

≒may have p.p.～

(ex) The answer could have been right.

その解答は正しかったかもしれない

③未来完了(の will have p.p. の代用)「(未来の一時点までに)～してしまっ

ているかもしれない」

(ex) By this time next week you could have forgotten all about this.

来週の今頃には、君はもうこんなことはすっかり忘れてしまっている  
かもしれませんよ

must の用法。

must は、「もう絶対!」という判断を、動詞に付け加えます。

☞ must は、「抵抗しがたい(何らかの)力が働いて、それ以外他の選択の余地がない」というイメージ。

(1) 「～しなければならない」 [義務]

(ex) You must come here by noon. ☞ 「昼までに"絶対"来るんだ  
 昼までには君はここにこなくてはならない よ!」。そんなイメージ。

「～しなければならない」という must は have to で言い換えることができます。

→ You have to come here by noon.  
 昼までには君はここにこなくてはならない

また、文脈によっては You must が「ぜひ～してください」という、「勧誘」の意味になることもあります。

(ex) You must come here.  
 ぜひ当方へ来てください

それから、名詞の must も「不可欠のもの」という意味で、会話ではよく用いられます。

(ex) This guidebook is a must.  
 このガイドブックは絶対必要なものだ  
 When you go to the ceremony, a hat is a must.  
 その式典に参列するときには、帽子を忘れてはならない

(2) 「～する[である]に違いない」 [肯定的断定]

☞ 「もう絶対!」。そこに(主観的な)推量加わると、「もう絶対～だろう」  
 → 「～する[である]に違いない」という、断定的な表現[意味]になる。

(ex) You must be tired.

あなたは疲れているに違いない

You must know where the man is. He is a friend of yours.

君はその男の居所を知っているはずだ。友だちなんだから

must の「～しなければならない」と「～する[である]に違いない」(英文中での読み分けは、

### ①動詞で判断する

1. 「must+動作動詞」 → 「～しなければならない」

(ex) You must do it now. 君は今それをしなければならない

2. 「must+状態動詞」 → 「～する[である]に違いない」

(ex) You must be tired. 君は疲れているに違いない

### ②内容で判断する

1. 「主観的推量の余地が低い」 → 「～しなければならない」

(ex) He commit a crime, so he must be punished.

彼は犯罪を犯したので罰せられなければならない

2. 「主観的推量の余地が高い」 → 「～する[である]に違いない」

(ex) He is very smart, so he must solve the problem.

彼は頭が良いのでその問題を解けるに違いない

それから、「～する[である]に違いない」という意味の must も have to で言い換えられます。

→ You have to be tired.

あなたは疲れているに違いない

### (3) must not do[原形]～「～してはならない」 [禁止]

會 「～しない」こと以外に選択の余地を与えない → 「～してはならない」となる。直訳は「～しないことをしなければならない」。

must not の短縮形は mustn't 。

(ex) You must not tell a lie.

ウソをついてはならない

「～しなければならない」「～する(である)に違いない」という意味の must は have to で言い換えることができますが、don't have to は「～しなくてもいい (=need not)」という意味で、must not とは意味が異なります。

📖 don't have to の直訳は「～すべきことを持っていない」そこから「～しなくてもいい」となる。

(ex) Do you have to go to school today? 📖「～しなければならない」という have to。

君は今日学校に行かなくてはならないのかい

Tom has to be kidding. 📖「～するに違いない」という have to。

トムは冗談を言っているに違いない

You don't have to come here. 📖 don't have to で「～しなくてもいい」。

君はここにこなくていい

=You need not come here.

### 《 もう一步深く!! must と have to の違い 》

must の場合、「抵抗しがたい(何らかの)力が働いて、それ以外他の選択の余地がない」。その結果、もうどうあっても「絶対～しなければならない」というイメージ。

have to の場合、「to do~(これから～するという行為)を have している → (外的な要請によって)あることをする[しないといけない]状況を抱えている」というイメージ。

have to は must のような「～する以外もう選択の余地がない」というニュアンスはないので、

I have to finish this report by the end of today, but I'll go on a date with Nancy instead.

今日中にこのレポートを仕上げなければいけないが、でもそうする代わりにナンシーとデートするつもりだ

という表現が成り立つ。この英文の have to は must では言い換えられない。

ちなみに have to はよく have got to で言い換えられるが、have got to の方が切迫感が強くなり、「どうしても～しなくては」といったニュアンスになる(より must に近くなる)

※主にイギリス英語では、have to は「習慣的[反復的]な義務」を表

し、have go to は「(一回限りの)特定の義務」を表す。

(ex) My daughter is in trouble. I've got to go.

娘がトラブルなんだ。行かなくては

それから need to も have to とほぼ同じ意味で用いられるが、have to が外的な要請によって「～しなければならない」のに対して、need to は、話し手自身の必要性から「～する必要がある」という場合に用いる。

(ex) I need to stay home to prepare for the exam.

試験準備のために家にいる必要がある

☞ 話し者は、実際家にいる可能性が高い。

I have to stay home to prepare for the exam.

試験準備のために家にいなければならない

☞ 話し者は、実際には家にいない可能性もありうる。

### 《 must に関するその他の注意点 》

1. 「～しなければならなかった」は had to を用いる。

(ex) I had to obey their orders.

彼らの命令に従わなければならなかった

☞ 時制の一致で must が過去の内容で用いられることはある。

(ex) She said (that) we must[=had to] follow the rule.

我々はその規則に従わなければならぬと彼女は言った

2. Must I do[彫]~? (私は～しなければなりませんか) に対する答え方

(ex) Must I do it at once?

私はすぐにそれをしなければなりませんか

① 「はい、そうしなければなりません」 → Yes, you must.

② 「いいえ結構です(しなくてもいいですよ)」 → No, you needn't.

☞ No, You mustn't. とは言わない。

needn't は need not の短縮形。No, you need not. でも可。

### 3. 「義務(～しなければならない)」における強制力の強さ

① must

↓

② have got to

↓

③ have to

↓

④ had better    ☞ should などより強制力が強い。

↓

⑤ ought to      高圧的な印象を与えるので会話などで

は用いない方が無難。

↓

⑥ should      ☞ should が一番弱い。

### 4. 「断定(～する[であるに]違いない)」は肯定文でのみ用いる

否定文・疑問文では can を用いる

#### ①否定文

(ex) It can't be true.      ☞ 「否定的断定」は can't を用いる。

それが事実のはずがない

#### ②疑問文

(ex) Can it be true?      ☞ 断定の must は疑問文では用いない。

それが事実のわけがあるだろうか

### 5. 「～した[だった]に違いない」は must have+p.p.～ で表す

(ex) He must have been handsome when he was young.

彼は若いときはさぞかしハンサムだったにちがいない

☞ must have+p.p.～ が 「～してしまっていないなければならない」

となることはまずない。



### 1.発音の仕方

have to, has to はそれぞれ [hæftu] [hæstu] と発音する。  
ただし、子音の前では to は [tə] と発音する。

(ex) I have to go.

もう行かなければならない

### 2.疑問文の作り方

Do[Does/Did] S have to do[原形]~?

(ex) Do I have to go there?

そこに行かなければなりませんか

Ⓜイギリス英語では Have S to do[原形]~? となることもある。

### 3.否定文の作り方

S don't[doesn't/didn't] have to do[原形]~.

(ex) You don't have to go there.

君はそこに行く必要はない

Ⓜイギリス英語では S have not to do[原形]~ となることもある。

### 4.must と違って、他の助動詞と共に使える

(ex) You will have to go there.

君はそこに行かなければならないだろう

### 5.have to を用いた慣用表現

All S have to do is (to) do[原形]~. Sは~しさえすればいい

(ex) All you have to do is (to) go there.

君はそこに行きさえすればいい

should[=ought to] の用法。

should は、「当然～すべきだ(が未だそれが成されていない)」という判断を、動詞に付け加えます。

☞ should は shall の過去形。shall の『核』のイメージは「(神の意志として)～すること[義務など]を負っている」。それが過去形(should)となって「(～する義務を負っていたのに)未だそれが成されていない→当然～すべきだ」となる。

should は ought to で言い換えることができます。

☞ ought to の場合、「～することが正当だ[好ましい]」というニュアンスが加わる。

(1) 「～すべきだ」 [義務]

(ex) You should[=ought to] look after your little brother.

君は弟の世話をすべきだ

(2) 「～するはずだ」 [(現在時における)可能性・推量]

☞ 「当然～すべきだ」という should に推量の意味合いが加わった表現。

(ex) They should[=ought to] arrive by ten o'clock.

彼らは10時までには到着するはずだ

《「可能性・推量」の may[might], can, should について》

以下の問題、どれが正解になるでしょうか。may[might], can, should はどれも「推量」を表すことがあります。迷ってしまいますね。問題文の意味は「もし急がないと、その列車に乗り遅れるかもしれませんよ」となります。

Q : You ( ) miss the train if you don't hurry up.

- ① can    ② may    ③ should

結論から言うと may が正解で can, should は不正解です。

can は「可能性・推量」の意味で使われることがありますが can は「(事件状況などが外的な要因によって～する[ある]ことが) 理論上ありうる」ことを表し、「現実の可能性」については may, might, could を用います(could → might → may の順に可能性[確率]が高まる。may で約50%程度)。つまり

(ex) According to the radio, it could[may, might] rain this evening.

ラジオによると今晚雨になるかもしれない

といったような文の場合、この文の could, may, might の代わりに can は使えません(従って本問で can は不正解になる)。

次に should が「可能性・推量」を表す場合、話し手の期待に沿う可能性について言う場合に用います(従って本問で should は不正解になる)。推量のが成り立つのは、以下のような場合です。

(ex) He is leaving home now. He should reach the office in an hour.

彼は今家を出ます。1時間で会社に着くでしょう

According to this map, this should be our way.

この地図によると、これが我々の進路のはずだ

They have fixed it, so it should be all right now.

彼らが修理してくれたのだから、もう大丈夫です

may の場合、主観的な判断を表し、「現実の可能性」「理論上の可能性(=can)」どちらの意味にも使えます。

ただし「可能性・推量」の may は疑問文では使えません。

× May he still be at the station?

彼はひょっとしてまだ駅にいるでしょうか

○ Do you think he still is at the station?

△ Might he still be at the station?

罫 might は疑問文でも使えるが、一般的な言い方ではない。

### (3) should の注意すべき3用法。

會これらの should は ought to で言い換えることはできない。

- ①「要求」「提案」「命令」「決定」を表す動詞や形容詞など（要するに「～せよ」「～した方がいい」といった、相手に対する願望や要求を表すような意味を持つもの）の後の that 節中の動詞は、「(should)+do[原形]」にする。

會 should は省略できるが、その場合、後の動詞は「原形」のままにしておかなくてはならない。

1. S + Vt + that S + (should) + do[原形] ~.

※下線を引いた語は頻出。

①要求(demand「要求する」, require「要求する」, ask「要求する」, request「要求する」

insist「要求する、言い張る」, urge「要求する、言い張る」等)

會 urge には「～するよう(熱心に)勧める」という、「提案」の意味もあり。

②提案(suggest「提案する」, propose「提案する」, advise「忠告する」, recommend「勧める」等)

③命令(command「命令する」, order「命令する」等)

④決定(decide「決定する、結論を下す」等)

(ex) He insisted that I (should) pay the bill.

彼は私がおその勘定を払うよう言い張った

2. 形容詞 + that S + [should] + do[原形] ~.

※下線を引いた語は頻出。

necessary「必要な」, urgent「緊急に必要な」, important「重要な」, essential「不可欠な」

desirable「望ましい」, crucial「極めて重要な」, vital「極めて重要な」, advisable「望ましい」

imperative「絶対必要な」

繰り返しになりますが、要するにこのタイプの形容詞は、「何かがなされなければならない」とか「重要である」といった(相手に対する要求・勧告・願望を含意する)意味のものです。

(ex) It is necessary that you (should) pack and leave at once.

君はすぐに荷作りして出かける必要がある(→ 出かけた方がいい)

## 《 もう一歩深く!! 動詞の原形の持つイメージ 》

動詞の原形の『核』のイメージ、それは「まだ行われていない」です。  
例文で見てください。

(ex) Tell me the truth.

真実を話してください

I want you to study harder.

君にもっと一生懸命勉強してもらいたい

上の英文の Tell, study は(話者がしてほしいと思っていることであり)、  
確かにまだ実際には行われていないこと[行為]ですね。

これがわかると、どうして「要求・提案・命令・決定」を表す動詞などの  
後の that節内で(たとえ should が省略されても)動詞の原形が来るのか  
その理由が理解できます。that節内の内容は、話者が「～してほしい」と  
思っているまだ実際にはまだ行われていないこと。だから動詞の原形で  
表すのです。

これは「命令文が命令する内容 = (話者がしてほしいと思っている)まだ  
行われていない内容 ⇒ 動詞の原形で表す」のと全く同じなのです。

### ② 「感情・判断の should」。

1. 疑問詞の後ろに置いて、驚きや意外な気持ちを表わす。

☞ 「もし～することを負うことになったら」という仮定の意味合いから  
「意外性」を表すことになる。

このような should は「一体(全体)」などと訳します。

(ex) How should I know?

一体どうして私が知っているというの

Why should the artist has died so young?

一体何故その芸術家はそんなに若くして死んだのか

2. It is + 形容詞[分詞]・名詞 + that S+V～ の構文中で、

I (「良い」「悪い」といった)話者の主観的判断を表したい

☞ 「形容詞[分詞]・名詞」=「話者の(良い・悪いといった)主観的判断を表すもの」となる。

Ⅱ (「驚き」「憐れみ」といった)話者の感情を強調したい

㊦「形容詞[分詞]・名詞」=「話者の感情を表すもの」となる。

場合、**that節内で「should+do[原形]」が使われます**(この should は①と違い、省略されることはない)。

主観的判断を表す should は、話し手が頭の中で考えて、それを(真実はどうあれ)主観的に述べて[判断して]いることを表します。

(ex) It is a good thing that he **should study** harder than before.

彼が前よりよく勉強することはいいことだ

It is lucky that the weather **should be** so nice.

天気がこんなにいい[よかった]なんてついている

事実として(主観を込めずに)客観的に述べるのであれば、直説法を用い、以下のように should は使いません。

(ex) It is lucky that the weather **is** so nice.

天気がこんなに良い[よかった]なんてついている

話者の感情を強調する should の例が以下です。

(ex) It is surprising that you **should know** so much her.

君が彼女についてそんなによく知っているとは驚きだ

It is a pity that she **should have failed** the examination.

彼女が試験に落ちたとは気の毒に

特に感情を強調しないなら直説法を用い、以下のように should は使いません。

(ex) It is a pity that he **failed** the driving examination.

彼が運転免許試験に落ちたのは残念なことだ

③ for fear **S+should[would/might]+do[原形]~.**

「~しないように(するといけないので)」

㊦「もし~することを負うことになったら」という仮定の意味合いから「用心」を表すことになる。

for fear that **S should[would/might] do[原形]~** となることもある。

(ex) Take your umbrella with you for fear it **should** rain.

雨が降るといけないのでかさを持っていきなさい

Walk quietly for fear you **should** wake the baby.

赤ん坊を起こさないように静かに歩きなさい

㊦この表現は in case S (should) V～ で言い換えられる。

Take your umbrella with you in case it **should** rain[rains].

雨が降るといけないのでかさを持っていきなさい

in case の場合、would や might は使わない。

予測される事態の実現度がやや低いと話し手が感じる場合に should が用いられ、そのような(仮定的な)ニュアンスを含まない場合は should は用いない。

## レクチャー7

### will の用法。

will は、「**ほぼ確実にそうする[なるだろう]**」という(その場の時点での)判断を、動詞に付け加えます。

㊦ will の『核』のイメージは「**強い意志**」。

そこからまず「(意志として)～するつもりだ」という意味が生まれる。

そしてまた、他者の意志について語る場合、「(その他者は)～する(つもりだろう)」という「推量」の意味が生まれる。

#### (1) 「～するつもりだ」 [強い意志・固執]

㊦主語の強い意志を表す。

会話においては「発話時における強い意志」を表す。したがって、たとえば電話が鳴って「私が出ます」という場合、I will get it. などと言う。

※ただし、主語が一人称(I, We)の場合には「前もって考えられていた意図」を表すのにも will が用いられることがある。

(ex) I will do my best.

私はベストを尽くすつもりです

The door won't[=will not] open.

そのドアはどうしても開かない

上例のように won't[=will not] が強い拒絶の意志を表すことがあり、「物」も

主語にとることがあります。

(2) 「～だろう」 [(現時点での)予測・推量]

☞ 他者の意志について語る場合、そこに(「～する(つもり)だろう」という「推量」の意味が生まれる。

(ex) Tim will come back by one o'clock.

ティムは1時までには戻って来るだろう

It will rain tomorrow.

明日は雨が降るだろう

(3) 「～するものだ」 [現在の習慣[習性]・一般的傾向]

「どうしても～したがるものだ」

☞ 「確実にそうなる[する]」から「習慣・習性・一般的傾向」を表す。

(ex) Accidents will happen.

事故は起こるものだ

Boys will be boys.

子供は子供だ → 男の子の腕白は仕方がない

Oil will float on water.

油は水に浮く

上例は油の習性を強調した英文と言えます。普通、自然法則で繰り返される動きには「現在時制」を用います。

(ex) The sun rises[× will rise] in the east.

太陽は東から昇る

(4) Will you do[願]～? 「～しませんか」 [勧誘・依頼]

= Won't you do[願]～? 「～してください」

☞ 相手の意志を問う。そこから「勧誘・依頼」の意味が生まれた。

Will you ~? が、単に相手の意志を問う(「～しますか」)場合には、文尾を上げて発音する(逆に[勧誘・依頼]の場合には文尾を下げて発音する)。

(ex) Will you shut the window?

窓を閉めてくれますか

Bring me a glass of water, will you?



水を一杯持ってきてくれますか

㊦命令文の後の will you は please の代用表現。

Won't you have some more coffee?

コーヒーをもう少しいかがですか

㊦ Won't you ~? の方が、より丁寧な表現になる。

Will you do this?

あなたはこれをするつもりですか

Will you [=Are you going to] send her abroad?

あなたは彼女を海外に派遣するつもりなんですか

## レクチャー 8

### would の用法。

would は will の過去形ですが、実際 would が「過去」の意味を表すのは、下の (1)~(3)の用法においてのみです。(4)、(5)は「現在」の仮定や推量を表します。

#### (1) 「～するだろう」「～しよう」 [時制の一致によって生じる would]

(ex) I think that she will come to the party.

ボクは、彼女がそのパーティーに来るだろうと思う

→ I thought that she would come to the party.

ボクは、彼女がそのパーティーに来るだろうと思った

上例は、時制の一致によって will が would に変化したもので、和訳の際には「～だろう」と訳してかまいません。

#### (2) 「(どうしても)～しようとした」 [過去の強い意志]

これは「現在の意志を表す will」が、過去時制で用いられたものです。will 同様、この would は、下の例文のように「物」を主語に取ることもあります。

(ex) The door would not open.

そのドアはどうしても開かなかった

### (3) 「(昔)よく～したものだ」

### 〔過去の不規則的習慣〕

これは「現在の習慣[習性]を表す will(～するものだ)」が、過去時制で用いられたものです。

(ex) I would often go fishing in the lake when I was a boy.

少年の頃、ボクはよく湖に釣りに行ったものだ

### 《 重要! 「used to do[彫]～」と「would do[彫]～」の違い 》

過去の習慣(昔よく～したものだ)を表すのは would だけではありません。used to do[彫]～も、似たような意味があります。大学入試では、両者の違いがよく狙われます。以下でその違いを整理してみましょう(特に②と③が重要)。

- ① 「used to do[彫]～」は過去の”規則的習慣”を表し、「would do[彫]～」は過去の”不規則的習慣”を表す。

(ex) I used to get up early when I was young.

私は若いころは早起きだったものだ

He used to visit us on Sundays.

彼は(毎週)日曜日には私どものところを訪れたものです

上例は、規則的習慣ですから used to がふさわしいと言えます。

- ② would は「状態動詞」と一緒に用いない(「動作動詞」と共に用いる)。

× People would believe that the earth was flat.

人々は地球は平らだと信じていたものだった

上例で、believe は状態動詞なので、would を「過去の習慣」の意味で使うことは出来ません。

しかし、used to は、「状態動詞」「動作動詞」どちらとも使うことができるので、上記の例文は

○ People used to believe that the earth was flat.

と書き直せば、正解になります。

なお、used to は「動作動詞」「状態動詞」を取った場合でそれぞれ以下のような意味を表します。

1. used to + 動作動詞「(昔)よく～したものだ」 [過去の習慣]

2. used to + 状態動詞「(昔)～だった」 [過去の状態]

特に used to be は was[were] と意味が同じと置いていいでしょう。

(ex) He is not what he used to be.

彼は昔の彼ではない

=He is not what he was.

③現在と対比された文脈では used to を用いる(would は使えない)。

つまり used to には、「今は違うのだが…」というニュアンスが込められるのです。

(ex) I used to smoke when I was young, but now I don't.

若いころはタバコを吸ったものだ。しかし今は吸わない

(4)「～するだろうに」 [仮定法の would]

(ex) Billy would help you if you were here.

ここにいたらビリーが君を手伝ってくれるだろうに

(5)仮定法の would が弱まって意味が転じた would。

①「非常に丁寧な勧誘・依頼」を表す

Will you do[願]～? や Won't you do[願]～? よりも Would you do[願]～? の方が、より丁寧な勧誘・依頼を表します。その理由は can よりも could の方が丁寧な意味になるのと同じ理由です。

(ex) Would you (please) carry this baggage to the counter?

この荷物をカウンターまで持っていってもらえませんか

②「好き嫌い」を表す

1.would like[prefre] to do[願]～ 「～したい(のですが)」

2.would like[prefer] A to do[願]～ 「Aに～していただきたい(のですが)」

會平叙文では主語は一人称(I, We)、疑問文では二人称(You)になる。

would like[prefer] は 'd like[prefer] と、短縮形になる。

この表現は want to do[原形]～(～したい) や want A to do[原形]～(Aに～してほしい) よりも丁寧な意味になります。

(ex) I would like to watch the movie.

その映画をみたいのですが

Would you like me to shut the window?

私に窓を閉めてほしいですか → 私が窓を閉めましょうか

また If you would like で「もし(あなたが)お望みなら」となります。

3. would rather do[原形]～ (than do[原形]…) 「(…するより)むしろ～したい」  
= prefer to do[原形]～ (rather than to do[原形]…)

(ex) I would rather stay at home than go shopping in this rain.

この雨では買物に行くよりは、むしろ家にいた方がいい

### ③ 「推測・婉曲」を表す。「～だろう」

この would は will よりも確信の度合いが低い推量を表します。  
「婉曲」とは、間接的に[遠回しに]、柔らかく言う表現です。

(ex) It would be about a mile from here to the station.

ここから駅まで1マイルくらいでしょう

How old would she be?

彼女はいったい幾つでしょうか

I think this would be cheap at 1,000 yen.

1000円なら、これは安いと思います

☞「実際のところは知らないが、もし千円だったら…」という意味がある。

It would be difficult to accept your offer.

お申し出をお受けするのは無理かと存じます

Would it be all right if I sat here ?

ここに座ってもよろしいですか

## 《可能性・推量を表す助動詞について》

「可能性[確信の度合い]の高さ[強さ]」

1. must 「違いない」 (100%)  
↓
2. will 「だろう」 (95~100%)  
↓
3. would 「だろう」 (90~95%)  
↓
4. should/ought to 「はずだ」 (70~90%)  
↓
5. can 「(理論上)可能性がある」 (50~70%)  
↓
6. may 「かもしれない」 (50%)  
↓
7. might 「(ひょっとして)かもしれない」 (30%)  
↓
8. could 「(ひょっとして)かもしれない」 (10~20%)

## レクチャー9

need の用法。

need には、助動詞の need と(一般)動詞の need があり、それぞれの用法、その違いが問われやすいのです。詳しく見ていくことにしましょう。

(1)助動詞の need は「need+do[[原形]]」の形(意味は「~する必要がある」)で用いる。

會否定形は need not 。その短縮形は needn't 。

一般動詞の need は「need+to do[[原形]]」の形で用いる。

(2)「助動詞の need」が否定文や疑問文でしか使えないのに対し、「(一般)動詞の need」は肯定文・否定文・疑問文全てで使える。

したがって「君はもっと一生懸命勉強する必要がある」という日本語を

○ You need to study harder.

と、(一般)動詞の need を用いて表現することはできても、

× You need study harder.

と、助動詞の need を用いて表現することはできません。

否定文や疑問文では、助動詞の need、(一般)動詞の need 両方使えますが、それぞれのとる形【構造】が問題でよく問われます。

たとえば「君は来る必要がない」という言い方は、助動詞、一般動詞それぞれの need を用いて以下のように書くことができます。

① You need not come. [助動詞]

② You don't need to come. [(一般)動詞]

【角解言説】 助動詞の否定は、助動詞の後ろにnotをつけねばい。つまり助動詞のneedは「need not do[原形]～」が否定形になる。(一般)動詞の場合、直前にdon't[doesn't/didn't]をつけることによって否定文を作るので、(一般)動詞のneedの場合、don't等を直前につけねばならない。更に「～する必要がある」という場合には、「need to do[原形]～」と、to不定詞が直後にくる。だから全体は「don't need to do[原形]～」という形になる。以下のような選択肢に引掛からないように注意せよ!

× don't need come

× need not to come

× need to not come

(3)一般動詞の need は目的語に動名詞も取ることができる。

ただその場合、「～される必要がある」という意味になる。

need { to do[原形]～ 「～する必要がある」 [能動]  
doing～ 「～される必要がある」 [受身]

(ex) He will need looking after.

彼の面倒をみてやる必要がある

The house needs repairing.

家は修繕が必要だ

=The house needs to be repaired.

=We need to repair the house.

## レクチャー 10

### その他の助動詞。

(1) had better do[原形]～ 「～した方がいい」。

had better は「警告」「脅し」を含意することもあるので、通例目下の者に対して用いる表現と言えます。had better の強調形として had best という表現もあります。

(ex) You had better go there.

君はそこに行った方がいい

(2) would rather[sooner] do[原形]～ (than do[原形]…) 「(…するより)むしろ～したい」。

(ex) I would rather sleep than watch TV.

テレビを見るよりむしろ寝たい

(3) How dare S+V[原形]～? 「よくも～するものだな」。

これは相手に対する非難を表す表現です。

(ex) How dare you say such a thing to me?

私に向かってよくもそんなことが言えるものだな

會 dare(あえて～する)も need と同じように、疑問文・否定文でしか使わない助動詞だが、大学入試で出るのはほとんど上記の表現。

(4) Shall I do[原形]～? 「私が～しましょうか」。

(ex) Shall I open the window?

私が窓を開けましょうか

(5) Shall we do[原形]～? 「(一緒に)～しませんか」。

=Let's do[原形]～!

(ex) Shall we dance?

ダンスを踊りませんか

《 shall について 》

shall は会話文では「提案・申し出」の意味で用いられるが、元々のイメージは、「(神の意志として) ~すること[義務など]を負っている」。

そこから「決意」「当然」「義務」「予測」といった意味が生まれる。

(ex) I shall never forget your kindness.

決してあなたのご親切を忘れません

You shall pay your debt.

あなたは借金を支払わなければなりません

ただし、主語が二人称・三人称の shall は要注意。主語に対する話者の「意志・約束・脅迫」などを表して、「~して[させて]やろう」という意味になる。

(ex) You shall have a bicycle on your birthday.

誕生日に自転車をあげよう

=I will give you a bicycle on your birthday.

She shan't come here.

私は彼女をここへ来させないぞ

=I won't let him come here.

☞ shan't は shall not の短縮形。

Don't move or you shall die.

動くな。さもないと殺すぞ

=Don't move or I will kill you.

(6) 「強調」の助動詞 do。

「強調の do」は、「do+(一般)動詞の原形」の形で用い、(直後の)動詞を強調します。「実際」「本当に」「ぜひ」などと訳すことが多いです。



(ex) "Why didn't you come yesterday?" 昨日はどうして来なかったんだ  
"But I did come." いや行ったとも

## レクチャー 11

「not」の位置に注意すべき3つの助動詞。

not の位置に注意すべき助動詞は、以下の3つですが、覚え方は、

「(否定の)not は不定詞(to+do[原形]～ / do[原形]～)の直前に置く」

と覚えるとカンタンです。

(1) 「ought to do[原形]～」の否定形は「ought not to do[原形]～」。

(ex) You ought not to say such a thing in public.

[×ought to not]

人前でそんなことを言うべきではない

(2) 「had better do[原形]～」の否定形は「had better not do[原形]～」。

(ex) You had better not go out by yourself.

[×had not better]

一人で外出しないほうがいい

(3) 「would rather do[原形]～:むしろ～したい」の否定形は「would rather not do[原形]～」。

(ex) I would rather not say anything about religion.

[×would not rather]

宗教については、どちらかというと言りたくない

「助動詞+have+p.p.～」。

助動詞を用いて過去の内容を述べようとする際に、助動詞の後ろに have+p.p.～ が付きます。助動詞の後ろの have+p.p.～ は「過去の目印」と覚えるといいでしょう。

以下にそれぞれの助動詞が、have+p.p.～ を取った場合の意味をまとめてみましょう。特に should have+p.p.～、need not have+p.p.～ などについては( )内の言外の意味を理解することも大切です。

(1) must	} + have+p.p.～	(1) 「～した [だった] に違いない」
(2) may[might]		(2) 「～した [だった] かも知れない」
(3) can't		(3) 「～した [だった] はずがない」
(4) should[ought to]		(4) 「～すべきだった(のに実際にはしなかった)」
(5) need not		(5) 「～する必要はなかった(のに実際にはした)」
(6) would like to		(6) 「～しておきたかった(が実際にはしなかった)」

なお、should[ought to]+have+p.p. ～には「(当然)～したはずだ」「(当然)～してしまっているはずだ」という意味もあり、こちらも重要です。

(ex) Bill must have broken the window.

ビルが窓を割ったに違いない

I may not have told you to do that, but it doesn't matter.

君にそれをするよう言っていなかったかも知れないが、でもそんなことは重要じゃない

You can't have met him in the park yesterday, because he has been in London since last week.

君が昨日公園で彼に会ったはずがない。なぜなら彼は先週からずっとロンドンにいたからだ

She must have felt lonely then, so I ought to have been kinder to her.

あの時彼女は寂しかったに違いない。だからボクはもっと彼女に親切にすべきだった

You needn't have worried about me at all.

君はボクのことを心配する必要など全くなかったのですよ

I should have telephoned you last Monday, but I was too busy.

先週の月曜に君に電話すべきだった（が実際にはできなかった）。でもボクはあまりに忙しかったんだ

Their train should have arrived at Manchester by now.

彼らの乗った列車は今頃はもうマンチェスターに着いているに違いない（着いているはずだ）

I should have locked the door.

ドアにカギを（当然）かけたはずだ

㊦ 上例は「私はドアにカギをかけるべきだったのに（かけなかった）」の意味にもとれる。このあいまいさもあって、この should have+p.p. は may, can't, must などほどには用いられない。

㊦ had better+have+p.p. は、

「～したほうがいい（していなかったら大変なことになるぞ）」

といった、「警告・脅迫」の意味が込められる。

つまり話し手がまだその（行為・事態の）結果を知らない場合に用いられる。

(ex) You had better have told him to do it.

それをするように彼に言っただろうな（言っていなかったら大変なことになるぞ）

# 態

## レクチャー 1

### 受動態とその作り方。

#### 1. 「能動態」と「受動態」。

- ①能動態……動作・行為を「する」側を主語にした英文
- ②受動態……動作・行為を「される」側を主語にした英文

#### 2. 受動態の作り方。

受動態の作り方の基本は、以下の通りです。

- ①元の 能動態の)文の目的語を主語にして、
- ②動詞を「be動詞+過去分詞」に変え、
- ③元の文の主語は「～によって」という前置詞の by をつけて文尾に移動する。

(注1):元の文の目的語が受動態における主語になるということは、元々目的語をもっている文しか受動態を作ることはできないということ。

そして受動態の英文の「be動詞+過去分詞」の後ろは、目的語が一つ欠けた構造になる。

(注2):ただし、いくら目的語があっても、以下のような場合は受動態は作れない。

1.主語から目的語への積極的な働き掛けが弱い動詞の場合

(ex) resemble「似ている」   belong to「所属している」   meet「会う」  
cost「費用がかかる」   equal「等しい」   lack「欠いている」

2.目的語がoneselfやeach otherの場合。

要するに受動態は、「主語が他者から(何らかの)作用・影響・被害などを受けるような場合」に用いられるのが基本なのだ。

他動詞だからといって、自動的に受動態になれるわけではない。

(注3):元の文の目的語が代名詞だった場合、それを主語にする際には、主格に直す。 (ex) me → I

(注4):元の文の主語が代名詞だった場合、byをつける際、目的格に直す。 (ex) He → by him

(注5):助動詞を含む文の受動態は「S+助動詞+be p.p. ～」の形になる。その疑問文形は「助動詞+S+be p.p. ～?」となる。

(ex) They will finish the work.

→ The work will be finished (by them).   助動詞は「態」が変わっても

→ Will the work be finished (by them)?   常に主語の直後に置かれる。

(注6):完了形の受動態は「have[has/had]+been p.p.～」となる。

それぞれの文型(第三文型、第四文型、第五文型、その他)が受動態になる場合の公式を、記号と簡単な例文で表してみましょう。

### (1)第三文型。

☞Vtとは、「他動詞」のこと。

S + Vt + O ⇨ O + be p.p. + by S.

p.p.とは、「過去分詞」のこと。

(S)

(ex) She loves her husband.

彼女は夫を愛している

→ Her husband is loved by her.

彼女の夫は、彼女から[に]愛されている

### (2)第四文型。

第四文型はO<sub>1</sub> を主語にするか、O<sub>2</sub> を主語にするかで2種類の受動態が作れます。

S + Vt + O<sub>1</sub> + O<sub>2</sub> ⇨ O<sub>1</sub> + be p.p. + O<sub>2</sub> + by S.

(S)

⇨ O<sub>2</sub> + be p.p. + (to/for) + O<sub>1</sub> + by S.

(S)

(ex) The lady gave Mike the money.

その女性はマイクにお金をあげた

→ Mike was given the money by the lady.

マイクはその女性からお金をもらった

→ The money was given to Mike by the lady.

そのお金はその女性からマイクに渡された

ただし、上例のように、O<sub>1</sub> と O<sub>2</sub> の両方が受動態の主語になれる動詞は、以下のようなものに限られます(別に覚える必要はありません)。

give「O<sub>1</sub>にO<sub>2</sub>を与える」 offer「O<sub>1</sub>にO<sub>2</sub>を申し出る」 teach「O<sub>1</sub>にO<sub>2</sub>を教える」 allow「O<sub>1</sub>にO<sub>2</sub>を与える」  
tell「O<sub>1</sub>にO<sub>2</sub>を話す」 grant「O<sub>1</sub>にO<sub>2</sub>を与える」 forgive「O<sub>1</sub>のO<sub>2</sub>を赦す」 lend「O<sub>1</sub>にO<sub>2</sub>を貸す」

O<sub>1</sub> を主語にした受動態が好まれるか、O<sub>2</sub> を主語にした受動態が好まれるかは、動詞によって異なります。

(3)第五文型。

S + Vt + O + C ⇨ O + be p.p. + C + by S.  
(S)

(ex) They elected Joe captain of the team.

彼らはジョーをチームのキャプテンに選んだ

→ Joe was elected captain of the team by them.

ジョーは彼らによってチームのキャプテンに選ばれた

(4)その他。

S + V i + (前) + O ⇨ O + be p.p. + (前) + by S.  
(S)

前(前)とは「前置詞」のこと。Viとは「自動詞」のこと。

自動詞でも、「自動詞+前置詞」の形で、その表す意味が(前置詞の)目的語に対してある種の(積極的な)影響・作用を及ぼす場合、受動態にすることができます。

(ex) Mary laughed at him.

メアリーは彼を笑った

→ He was laughed at by Mary.

彼はメアリーに笑われた

それから、一般の人、人々を表わす語を主語に持つ文は、受動態になっても by～は省略する、というルールがあります。具体的には以下のようなものです。

we, you, they, people, one

(ex) We should respect freedom of individual.

我々は個人の自由を尊重すべきだ

上記の英文を受動態にした場合、以下ようになります(We を by us とはしません)。

→ Freedom of individual should be respected.

個人の自由は尊重されるべきだ

その他に、以下のような場合も by～ は省略されます。

- ①行為者が不明瞭な場合 (someone, anyone, no one など)。
- ②行為者が明白な場合や、行為者を(あえて)言いたくないような場合。

## レクチャー2

### 「be動詞+過去分詞」の表す意味。

#### ①「～される」[動作重視]

(ex) The machine was broken by the kids.

その機械はその子供たちに壊された

The hill was covered by snow.

その丘は雪に(よってすっぽりと)覆われた

會 (会話などで) 「動作」を強調したい場合、be動詞の代わりに get が使われる。

#### ②「～されている」[状態・結果重視]

(ex) The machine was broken, so I couldn't use it.

その機械は壊れていたので使用できなかった

The hill is covered with pretty wild flowers.

その丘はきれいな野の花で覆われている

會 「状態・結果」を強調したい場合、be動詞の代わりに lie, remain, stay などが使われることもある。その場合、「～(のまま)である」などと訳す。

#### ③擬似受動態

擬似受動態とは、過去分詞が受動的な意味合いを失い、(状態を表す)形容詞化し、それが be動詞とセットで用いられた「be動詞+過去分詞」です。

(ex) I was surprised at the news.

その知らせにびっくりした

☞ I was surprised by them. (私は彼らに驚かされた) となると  
 (「動作」重視の) 受動態。

I'm interested in politics.

私は政治に関心がある

I am acquainted with the chairman of the club.

私はそのクラブの会長と知り合いです

Kim is married to a doctor.

キムは医者と結婚している

また「get+過去分詞」で「(自ら)~の状態になる」と、「変化」を表す意味になることがあります。

get married「結婚する」	get divorced「離婚する」	get dressed「服を着る」
get lost「道に迷う」	get engaged「婚約する」	get started「始める」
get washed「(体を)洗う」	get promoted「昇進する」	get cured「(病気が)治る」

become も「become+過去分詞」で「~の状態になる」となりますが、この場合の過去分詞は、「状態を表す形容詞(的なもの)」になります。  
get にも同様の用法がありますが、get の場合、「変化のプロセス」に重点があります。

☞ become は「変化した後の結果」に重点がある。

(ex) You will soon get[become] accustomed to the work.

君はその仕事にすぐに慣れるだろう

### 《 be supposed to do[願]~ 》

「~するはずだ、~することになっている」「~すべきだ」

(ex) They are supposed[scheduled] to come at 7 o'clock.

彼らは7時に来ることになっている

☞ be scheduled to do[願]~ は「~する予定になっている」。

Everybody is supposed to observe traffic regulations.

だれもが交通規則を守らなければならない

I am supposed to leave now.



もう出発しなければなりません

㊦ 否定文では「～してはいけないことになっている」「～してはならない」となる。

(ex) You are not supposed to smoke in this room.

この部屋では禁煙になっています

be supposed to do[願]～が「～すると思われる」という意味になることもある。

(ex) He is supposed to be guilty.

彼は有罪だと思われる

=It is supposed that he is guilty.

### 《 be動詞+過去分詞と文型判断 》

その be動詞+過去分詞部分が「～される」「～されている」といった受動的な意味を持っている場合には、その be動詞+過去分詞をワンセットでV(動詞)と判断すればいい。

(ex) I was surprised by their behavior.

S                  V

私は彼らの振る舞いに驚かされた

be動詞直後の過去分詞が(受動的な意味を失い)、状態などを表す形容詞化してしまっている場合には、その過去分詞はC(補語)と判断する。

(ex) I was surprised at the result.

S    V                  C

私はその結果に驚いた

㊦ また以下のようなものも、受動態ではないので注意。

① 「be動詞+自動詞の過去分詞」

be gone(行ってしまった)      be grown(大人になった、成長した)  
be fallen(落ちてしまった)

② 「be動詞+ -ed 型の形容詞」

be finished(終わった)      be learned(博識の)      be naked(裸の)  
be wicked(邪悪な)      be wretched(哀れな、ひどい)

(ex) All hope is gone.

希望はすべて失(う)せた

Are you finished?

もうお済みですか

He is learned in the law.

彼は法律に明るい

They were naked in the room.

彼らは部屋の中で裸だった

レクチャー 3

使役動詞の have を用いた受動表現。

使役動詞の have には、以下のような受身を表す表現があります。

have+O+p.p. 「Oを～される[してもらう]」

たとえば「私は財布を盗まれた」という場合、この have を用いて、以下のように表現できます。

I had my wallet stolen.

もちろん上例の英文は、rob や steal (の受動態)を用いても表現できます。

① rob A(人) of B(物) 「AからBを奪う」

→ I was robbed of my wallet.

② steal A(物) from B(人) 「BからAを盗む」

→ My wallet was stolen from me.

會使役動詞の get も「get+O+p.p.」で「Oを～される」という意味になることがあるが、その場合、S(主語)に何らかの責任の含みがある場合。目的語が「(本人の) 身体の一部」の場合が多い。

(ex) He got his right wrist broken.

彼は右手首を折られた

#### レクチャー4

by 以外の前置詞を用いる受動態。

以下にあげたものについては、一種のイディオムとして覚えてしまいましょう。

- (1) A is known
- |   |   |
|---|---|
| { | to B(人) 「AはBに知られている」                        |
|   | 會見極めのポイントは「A≠B」となる点。                        |
|   | for B(理由) 「AはBで有名だ」 =be famous[noted] for ~ |
|   | 會見極めのポイントは「B=理由を表す語句」となる点。                  |
| { | as B(人・物) 「AはBとして知られている」                    |
|   | 會見極めのポイントは「A=B」となる点。                        |

The singer is known to Japanese young people.

その歌手は日本の若者によく知られている

會「The singer ≠ Japanese young people」の関係になっている。

to は「到達点に向かっての方向」を表す前置詞。上例の場合、「その歌手(の名)」が(情報として) 日本の若者にまで達しているということ。

New York is known for its tall buildings.

ニューヨークは、高層建築(があること)でよく知られている[有名だ]

會 for は「～の故に」という理由の前置詞。

Mr. Hill is known as a good politician and gentleman.

ヒル氏は、良い政治家でありまた紳士として知られている

會 as は =、つまり「イコール記号」と考えるとよい。上例でも、

「Mr. Hill = a good politician and gentleman」の関係になっている。

The man is known to the local community as an eccentric.

その男は、その土地の人々には変人を通っている

㊦ 「The man = an eccentric」として(の情報が)、その土地の人に  
まで伝わっているということ。

be known～については、以下の表現が要注意です。

(ex) A man is known by the company he keeps.

人は自分が持っている仲間で(もって)判断される

(付き合っている仲間を見ればその人がわかる)

上例の英文中の by は、「～でもって」という”判断の基準”を表す by であって、  
受動態の、つまり「～によって」という”受身”の by ではありません。

㊦ be known の後ろに(受け身の) by があえて使われるのは、「(それを知ろう  
としていた)〇〇によって…が知られてしまった」状況の文脈で、「〇〇」  
を強調したい場合。

(2) be covered with A 「Aで覆われている」

(ex) The mountain top was covered with snow.

山頂は雪で覆われていた

(3) be crowded with A 「Aで混み合っている」

(ex) The beach was crowded with thousands of people.

何千人もの人たちがその浜に押しかけた

(4) be engaged in A 「Aに従事している」

(ex) He is engaged in foreign trade.

彼は外国貿易に従事している

(5) be occupied with[in] A ①「Aで忙しい」 ②「Aで(心[頭]が)いっぱいだ」

(ex) He was occupied with his business.

彼は自分の仕事で忙しかった

㊦ in の場合、直後に動名詞を伴う  
ことも多い。

My mind was occupied with my son.

私の頭は息子のことでいっぱいだった

(6) be caught in A 「Aに遭(あ)う、見舞われる」

(ex) I was caught in a shower on my way home.

帰り道でにわか雨に遭った

(7) be absorbed in A 「Aに夢中になっている[である]」  
=be lost in A

(ex) He was absorbed[lost] in the book.

彼はその本に夢中だった

(8) be acquainted with A 「Aと知り合いである」

(ex) I am acquainted with the chairman of the club.

私はそのクラブの会長と知り合いです

(9) be interested in A ①「Aに興味がある」  
②「Aに関係している、利害関係を持っている」

(ex) When young, I was interested in English literature.

若い頃、イギリス文学に興味があった

He was interested in an enterprise.

彼はある企業に関係していた[出資していた]

(10) be killed in A 「Aで死ぬ」

(ex) He was killed in the car accident.

彼はその自動車事故で亡くなった

(11) be filled with A 「Aで満たされている」

(ex) The glass was filled with water.

そのグラスは水で満たされていた

(12) be convinced of A 「Aを確信している」

(ex) He is convinced of his innocence.

=He is convinced that he is innocent.

彼は自分が無実であると確信している

(13) be opposed to A 「Aには反対だ」

(ex) We are opposed to the plan in terms of funds.

我々は資金の点で、その計画に反対である

(14) A(意見など) be based on B(事実など) 「AはBに基づいている」

(ex) His opinion is based upon false facts.

彼の意見は誤った事実に基づいている

(15) A(製品) be made of B(材料) 「AはBでできている」

會できた製品をみて、元の形[材料]がわかる場合に of を用いる。

(ex) This desk is made of wood.

この机は木でできている

(16) A(製品) be made from B(原料) 「AはBでできている」

會加工をされていて、できた製品から元の形[原料]が(見ただけでは)わからない場合に from を用いる。

(ex) Sake is made from rice.

酒は米でできている

(17) A(原材料) be made into B(製品) 「AはBになる」

會 into を「→」つまり、左から右に向かう矢印と考えるといい。ちなみに of や from は「←」と考えるといい。

(ex) The strawberries were made into jam.

そのイチゴはジャムになった

《 もう一步深く!! 「なぜ of は『材料』 で from は『原料』 か」 》

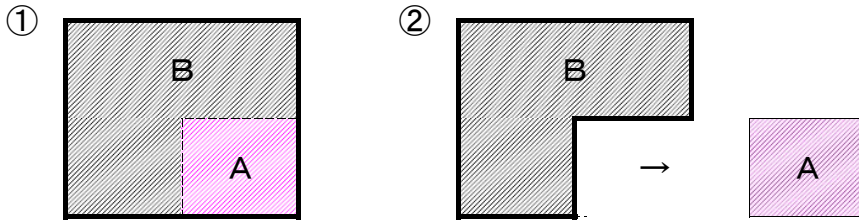
of の『核』のイメージは①「所属・所有」②「分離」。

下の図で見た方がわかりやすい。A of B のイメージである。

「B = 全体・大元[出所]・原因・所有者」

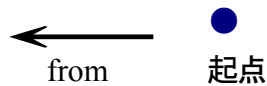
「A = 一部[部分]・結果・所属物」

両者には以下の図のような関係が成立している。



- 1.(Aから見ればBに)所属している
- 2.(Bから見ればAを)所有している
- 3.(AはBから)分離している
- 4.(AはBから)生じた

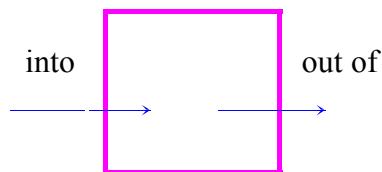
from の『核』のイメージは「起点(から離れる動き)」。



「起点」は「起源・由来[出所]」に通じる。

つまり、「A of B」はAとBとの距離が近い。それに対して「A from B」は(Bは「起源・由来[出所]」なので)AとBとの距離が遠い。

into は文字通り「in + to」。『核』のイメージは「～の中[内部]に入る」(反意語が out of)。



そこから「変化・移動・結果・衝突・没頭」などの意味が生じた。

Ⓧ in には「内部にとどまっている」という「静」のイメージがあるのに対し、into は「～の中に入って行く」という「動」のイメージがある。

「be動詞+感情動詞の過去分詞」と前置詞。

以下の英文を見てみてください。

(ex) She was disappointed by her son's behavior.

彼女は息子のふるまいにがっかりさせられた

これは disappoint(～をがっかりさせる) という動詞の過去分詞形である、disappointed(がっかりさせられた)を用いた「動作」重視の受動態です。ところが disappointed は「がっかりした(状態にある)」という、形容詞的な意味合いを持つこともあります。そしてそのような disappointed が be動詞とセットで用いられると、それは擬似受動態となり、直後の前置詞は by は取らず、at, about, with などを取ります。

- ☞ 「be動詞+感情動詞の過去分詞」の後に by が続けば、「動作」重視の受動態、それ以外の前置詞が続けば擬似受動態とみなすといい。  
at, about, with それぞれの前置詞で、その表すニュアンスが異なる。

《もう一步深く!! 「be+過去分詞の後の前置詞について」》

それぞれの前置詞のもつイメージがわかると「なぜそれが使われているのか」ということを理解しやすい。

① at

at は「(場所・時の)点」がそのイメージ。「(時の)点」は「瞬間」に通じる。つまり(その場における)瞬間的・一時的に感じる感情に対しては at が相性がいい。

② with

with は「～と共にいる」がそのイメージ。そこから「満足・喜び 嫌悪・失望」といった、比較的長く残る[留まる]感情と相性がいい。

- ☞ (感情動詞ではない) be occupied, be crowded, be covered, be filled なども with と共に用いられるが、これは「もの・こと」が「共にある」ということ。in なら「中に入っている[いて]」「中に入る」という場合に用いられる。



③ about

about は「周辺(にいる・ある)」がそのイメージ。その対象に関して(想定される)諸々の事柄に対してといったニュアンスが込められる。  
 She was worried about her son. と例えば、「彼女は息子とのことをあれこれ心配した」という意味になる。

disappointed(がっかりした(状態にある)) の場合、上記の前置詞全て後ろに取り得ます。

(ex) I'm disappointed at the news.

そのニュースにはがっかりだよ

☞そのニュースを知った[聞いた]時点での失望を表す。

I'm disappointed about the news.

そのニュースについてはいろいろとがっかりしているよ

☞そのニュースに関するいろいろな意味での失望を表す。

I'm disappointed with the news.

そのニュースにはがっかりしているよ

☞そのニュースに対する失望が持続していることを表す。

disappointed 以外で、複数の前置詞を取れる感情動詞の過去分詞の代表例

	by	at	with	about
be surprised[amazed](驚いた)	○	○		○
be bored(退屈した)	○		○	
be satisfied(満足した)	○		○	
be pleased[delighted](喜ぶ)	○	○	○	○
be frightened(怖い)	○	○		
be embarrassed(気恥ずかしい)	○	○	○	○
be annoyed(むかつく)	○	○	○	○

そしてこれらの表現は、直後に to do[願] や that節を取ることもあります。

(ex) I am surprised to hear you say so.  
君がそういうことを言うとは驚きだ  
=I'm surprised (that) you say so.

## レクチャー6

### 群動詞[句動詞]の受動態。

#### (1)群動詞[句動詞]とは。

群動詞[句動詞]とは、

「自動詞+前置詞」

「他動詞+副詞」

「他動詞+名詞+前置詞」

などの形で、それ全体で1つの動詞と同じ働きをするもののことを言います。群動詞[句動詞]が直後に目的語を取る場合、その群動詞[句動詞]を一つの他動と見なして、受動態を作ることのできるのです。

#### (2)群動詞[句動詞]の受動態。

群動詞[句動詞]を受動態にする場合、その群動詞全体を1つの他動詞とみなし、ワンセットで移動させます。

(ex) He laughed at me.

彼は私を笑った

たとえば上の英文の場合、laugh at ワンセットで「～を笑う」という意味を表します。したがって laugh at ワンセットで1つの「他動詞」と判断し、受動態を作る際もワンセットで移動させるのです(つまりバラバラにしない)。つまり、以下のような文になります。

→ I was laughed at by him.

私は彼に笑われた

at と by という前置詞が連続して、一見違和感があるように日本人には感じますが、これは問題ないのです。

以下に、それ全体をひとつの他動詞とみなすような群動詞とその受動態の具体

例を見てみましょう。

(3) 「自動詞+前置詞」型の群動詞。

laugh at A 「Aを笑う」 look into A 「Aを調べる」  
send for A 「Aを呼びにやる」 deal with A 「Aを処理する、扱う」  
bring about A 「Aをもたらす」 keep on A 「Aを身につける」

(ex) The parents sent for the doctor.

両親は医者呼びにやった

→ The doctor was sent for by the parents.

(4) 「他動詞+名詞+前置詞」型の群動詞。

take care of A 「Aの世話をする」 make use of A 「Aを利用する」  
lose sight of A 「Aを見失う」 find fault with A 「Aを非難する」  
pay attention to A 「Aに注意する」 take advantage of A 「Aを利用する」

(ex) I must take care of my dog.

私は犬の世話をしなければならない

→ My dog must be taken care of by me.

「他動詞+名詞+前置詞」型の群動詞では、他動詞の後の(形容詞・冠詞がついた)名詞を主語にして受動態を作れるものもあります。以下に例をあげてみましょう

(ex) We took full advantage of the chance.

我々はそのチャンスを十分に利用した

上記の英文は、まず of の目的語である the chance を主語にして受動態を作れます。

→ The chance was taken full advantage of.

そのチャンスは十分に利用された

更に、took の目的語である、full advantage を主語にした受動態も作れます。

→ Full advantage was taken of the chance.

會上例の full advantage のように、このタイプの受動態の場合、(主語になる)名詞の前に形容詞がついていることが多い。

このような群動詞には以下のようなものがある。

take care of (世話する)	make room for (席をあける)
take advantage of (利用する)	make a mess of (台無しにする)
take notice of (注意する)	

もう1つ例をあげてみましょう。

(ex) We must take good care of old people.

老人をよく世話しなければならない

上記の英文は、まず of の目的語である old people を主語にして受動態を作れます。

→ Old people must be taken good care of.

お年寄りには十分に[な]世話を受けなければならない

更に take の目的語である good care を主語にした受動態も作れます。

→ Good care must be taken of old people.

④ 「speak ill[well] of A:Aの悪口を言う[Aをほめる]」のような、

「自動詞+副詞+前置詞」型

の群動詞が受動態になる場合、副詞は be動詞と過去分詞の間に置くのが普通。

(ex) He spoke ill of his classroom teacher.

彼は担任の先生の悪口を言った

→ His classroom teacher was ill spoken of by him.

知覚動詞・使役動詞の受動態。

(1) 知覚動詞が作るSVOCの受動態。

知覚動詞が作るSVOCのCが動詞の原形だった場合、これが受動態になると、動詞の原形だったCはto不定詞に変化します。

$$\text{知覚動詞} + \text{O} + \frac{\text{do}[\text{原形}] \sim}{\text{C}} \Rightarrow \text{O} + \text{be} + \text{知覚動詞の過去分詞} + \frac{\text{to do}[\text{原形}] \sim}{\text{C}} \quad (\text{S})$$

(ex) I saw him enter the room.

私は彼がその部屋に入るのを見た

→ He was seen to enter the room.

彼はその部屋に入るのを(私に)見られた

(2) 使役動詞の make が作るSVOCの受動態。

使役動詞の make (「Oに(強制的に)～させる」) の場合も、知覚動詞と同様に能動態時に動詞の原形だったCが受動態になると、to不定詞に変化します。

$$\text{make} + \text{O} + \frac{\text{do}[\text{原形}] \sim}{\text{C}} \Rightarrow \text{O} + \text{be made} + \frac{\text{to do}[\text{原形}] \sim}{\text{C}} \quad (\text{S})$$

(ex) My mother made me wash the dishes.

母は私に皿を洗わせた

→ I was made to wash the dishes by my mother.

私は(母により)皿を洗わされた

ちなみに、使役動詞の let (「Oに(許可して)～させる」) を受動態にする場合、be allowed to do[原形]～ (「～することを許される」) を用います。

$$\text{let} + \text{O} + \frac{\text{do}[\text{原形}] \sim}{\text{C}} \Rightarrow \text{O} + \text{be allowed} + \frac{\text{to do}[\text{原形}] \sim}{\text{C}} \quad (\text{S})$$

(ex) My parents let me travel America by myself.

両親は私が一人でアメリカ旅行するのを許可してくれた

= My parents allowed me to travel America by myself.

→ I was allowed to travel America by myself by my parents.  
私は両親から一人でアメリカ旅行をすることを許された

## レクチャー 8

### 進行形の受動態。

「～している（最中だ）」という進行形(be 動詞+doing～)と、「～される」という受動態(be 動詞+p.p.～)がドッキングした「進行形の受動態」は、意味的には「～されている(最中だ)」ということになり、形としては「be動詞+being+p.p.～」で表します。

進行形「～している（最中だ）」 + 受動態「～される」

be動詞 + doing～

be動詞 + p.p.～

↓

進行形の受動態 「～されている(最中だ)」

be動詞 + being p.p.～

(ex) Now the bridge is being repaired.

現在その橋は修理されている最中である[修理中である]

The movie is being shown.

映画は現在上映中です

The game is being played.

今試合の最中です

ⓧくだけた口語表現では、The movie is showing. The game is playing. となることもある。

It is said[thought/ believed/ reported···] that S+V～型の受動態。

「It is said that S+V～:S～だと言われている、Sは～だそうだ」という、仮主語の it を用いた受動態があります。said 部分に thought が入れば、「Sは～だと思われている」、believed が入れば「Sは～だと信じられている」、reported が入れば「Sは～だと報じられている」となります。

(ex) It is said that he is the richest person in Japan.

彼は日本で一番の金持ちだと言われている

特に It is said that S+V～に関しては、(一般の人を表す) they[people] を用いて、They[People] say that S+V～という形で書き換えることができます。

→ They[People] say that he is the richest person in Japan.

更に It is said that S+V～型の構文は、that節内のSを文の主語にして

S is said[thought/ believed/ reported···] to V[動]～.

という構文で書き換えることができます。

→ He is said to be the richest person in Japan.

「Sは～だと言われている」型の書き換えの公式

It is said that S+V～.

=They[People] say that S+V～.

=S is said to+V[動]～.

更に例をいくつかあげてみましょう。

It is thought that this is the most mysterious case in history.

これは歴史上で最も謎に満ちた事件だとみなされている

→ This is thought to be the most mysterious case in history.

It is reported that a big earthquake occurred in China yesterday.

大きな地震が昨日中国で起こったと報じられている

→ A big earthquake is reported to have occurred in China yesterday.

## レクチャー10

### 受動態とそれを表す形のまとめ。

- |              |   |                        |                 |
|--------------|---|------------------------|-----------------|
| (1)現在完了の受動態  | ⇨ | have[has]+been+p.p.～   | ☞ p.p.は過去分詞のこと。 |
| (2)過去完了の受動態  | ⇨ | had+been+p.p.～         |                 |
| (3)未来完了の受動態  | ⇨ | will+have+been+p.p.～   |                 |
| (4)現在進行形の受動態 | ⇨ | am[are/is]+being+p.p.～ |                 |
| (5)過去進行形の受動態 | ⇨ | was[were]+being+p.p.～  |                 |
| (6)未来進行形の受動態 | ⇨ | will+be+being+p.p.～    |                 |
| (7)不定詞の受動態   | ⇨ | to+be+p.p.～            |                 |
| (8)動名詞の受動態   | ⇨ | being+p.p.～            |                 |
| (9)分詞の受動態    | ⇨ | being+p.p.～            |                 |